

## 旅

著者	武下， 一郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 7 0
ページ	7 5 - 7 5
発行年	1919-05-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6485">http://hdl.handle.net/2298/6485</a>

## 旅

一、二、丙 武 下 一 郎

汽船宿窓をひらけば沖つべに逆まく浪の眞白き  
が見ゆ

船出でしあとの港の淋しさに獨り残りて海を眺  
むる

窓さきに枝もたわゝと夏密柑實をつけたるが夕  
陽にあかく。(以上春)

浦の子は懐しき哉共に泳ぐ我を先生かと話して  
居たり

浪しづか浦のあなたを眺めつゝ今宵の泊りの町  
をおもひぬ

宿驛の晝は眞淋し箱馬車の淺黄のとばり重くた  
れたり

さねぐさと鶏鳴くきこゆ朝霧の森のあなたに人  
家あるらし(以上夏)

## 潮 鳴

二、三、甲 一 莊 島 秩 男

ほのぐらき連絡船のかたすみに潮なりをきく夜  
をあさみかも

港街ゆふべほのかに霧こめて汽笛さびしく空を  
なぐるゝ

かもめとぶ馬關の海はやゝあれてゆきこふ船に  
風さむみかも

## 雑

一、二、丙 本 田 保 章

夕暮の稻葉の河の瀬を高み逝きにし人を思へば  
詮なし(友の死を悼みて)

嵐する空に響きぬ入相の鐘は消ぬがにかすかな  
れども

温かき夜具にうもれて今宵また父母の恵を新に  
ぞする